地域社会における寺院の役割（四）

――台湾台南市の寺院調査から――

徳野　崇行、武井　謙悟、横山　龍顯

一　はじめに

駒澤大学の仏教経済研究所では二〇一六年度より、駒澤大学が曹洞宗の宗門大学としての役割を果たし、曹洞宗寺院とのつながりを多く持つため、宗門大学の附置研究所という性格を活用して曹洞宗を中心とした仏教寺院の現状を探る調査を実施することとなった。本報告は二〇一九年八月十七日から八月二十一日にかけて実施した台湾台南市の仏教寺院や廟での調査に基づくものである。調査担当者は徳野崇行、武井謙悟、横山龍顯の三名である。本調査の目的は次のように設定した。

寺院の社会的役割の国際比較のため、寺院調査を海外で実施する。当研究所研究員の都通憲三朗先生にコーディーネーターを依頼して、台湾台南市の廟や寺院での盆行事を調査する。北区にある開元寺の盂蘭盆会を主な調査対象とし、そのほかの台南市の廟や寺院での盆行事について調査する。

この調査目的に示されるように、本調査の目的は台湾の死者供養儀礼としてひろく行われている盂蘭盆会（うらぼんえ）、焔口（えんく）、普渡（ふと）といった盆行事を主な対象とし、東アジアにおける死者供養を儀礼から比較検討することにある。また前年度に実施した予備調査では、大観音亭、開基玉皇宮、鎮轅境頂土地廟、総爺古街下土地総禄境廟、祀典武廟、大天后宮、台南北極殿、台湾首廟天壇天公廟、台南孔子廟、永華宮、徳化堂、六合境馬公廟、東獄殿、台湾府城隍廟の十四の廟とともに、禅宗寺院である開元寺、妙心寺、竹渓禅寺の三ヶ寺の調査報告を行い、それらを紀要四十九号に掲載してあるので参照されたい。(1)

二　台湾台南市の盆行事

台湾では農事暦の旧暦七月に中元節を中心としつつ様々な盆行事が営まれており、仏教寺院では盂蘭盆会、道教廟では普渡がひろく執り行われている。台湾において旧暦七月は「鬼月」とも呼ばれ、浮かばれない無縁の死者たちが跋扈する季節と考えられている。こうした死者たちを台湾では「好兄弟（ハオシャンリー）」と呼び、お盆は彼らたちを弔う儀礼が宗教を超えて営まれているといってよい。

①開元寺の盂蘭盆会

まず台南市を代表する仏教寺院の一つである開元寺の盂蘭盆会について取り上げる。開元寺では、

写真１　盂蘭盆会の掲示物①

二〇一九年の場合、八月十八日に盂蘭盆会が実施された。写真1は開元寺の盂蘭盆会の縁起を説く掲示物である。「盂蘭盆法会的縁起」と題して次のように述べている。

「盂蘭盆」是「解倒懸」的意思・意指仰仗供養清浄十方僧眾的功德・救度惡道眾生出離苦海。
這個縁起是佛陀時代・目連尊者見到自己的亡母・墮在餓鬼道中受苦・因此藉神通力送飯菜給亡母・但是食物尚未入口・即化成灰炭。目連尊者於是前去請示佛陀、佛陀答道：「你的母親在生的時後・謗佛謗僧・不信因果正法、所以受此苦報・你雖然已經證到阿羅漢果・但是對於撥無因果的重罪・也難以化解救濟。唯有仰仗供養十方僧眾功德之力・方能令你母親脱離餓鬼之苦。」尊者聴了之後・歡喜奉行・在七目十五日僧眾解安居的自恣日・於盆中設甘麗美食・供養十方僧眾・因此超度了亡母。
為了提倡中國人慎終追遠的孝道精神及感恩父母、三實的恩澤・本寺敬建盂蘭盆法曾・並奉勧世間應行盂蘭盆之法・供佛及僧・以報父母生養撫育慈愛的恩恵。以恭敬心・孝順心・慈悲心、平等心蒞曾誦經仗三寶慈力・必能超薦累劫父母・冤親・以及十方法界一切亡霊往生善處・功德不可思議

この掲示物は、目連尊者が餓鬼道に堕ちて倒懸の苦を受ける母を救ったエピソードを説明しつつ、開元寺の盂蘭盆会の利益を説いている。後半の「為了提倡中國人」からの段落では、盂蘭盆会が孝道精神として説かれており、儒教的な価値観も含めた形で利益を強調している点は興味深い。そして「恭敬心、孝順心、慈悲心、平等心を以て、会の誦経に蒞(のぞ)めば、三宝慈力に仗って必ず累劫の父母、冤親を能く超薦す。以て十方法界の一切亡霊往生善処に及び、功德は不可思議なり。」と盂蘭盆会の利益を説く。「超薦」は日本語の成仏や供養に当たる語である。

写真２は写真１の掲示物と同じく盂蘭盆会を告知したものである。その表題が「孝子報恩　七月盂蘭盆」となっている点は、開元寺において盂蘭盆会が単に仏教的な供養儀礼という意味だけでなく、儒教の「孝」という倫理観にかなった行事として意味づけられていることを物語っている。

写真３は盂蘭盆会の予定を記した掲示物で、盂蘭盆会が午前の「誦地蔵経」、午後の「放焔口」という儀礼から成っていることがわかる。掲示物の中央に「農暦　7／18　上午　誦地蔵経　下午　放焔口」とあることがそれを示している。「第１枝香」では『地蔵菩薩本願経』の前半を、「第２枝香」では後半を読誦し、『地蔵菩薩本願経』一巻

写真２　盂蘭盆会の掲示物②

写真３　盂蘭盆会の時間割表

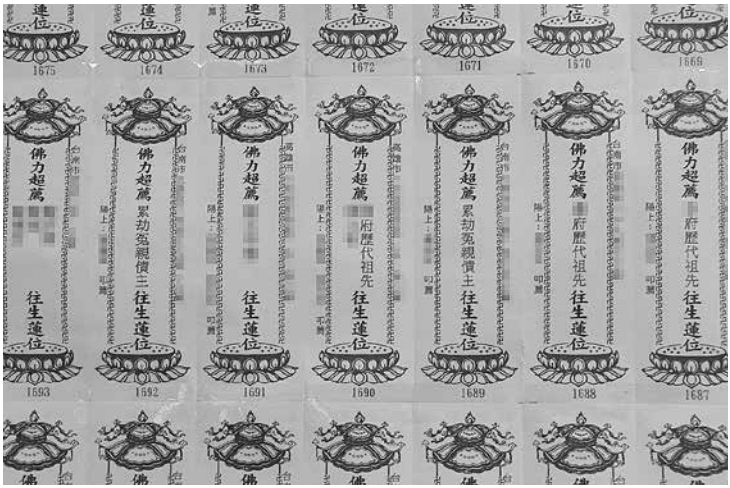

写真４　盂蘭盆会の紙位牌

を僧俗が一緒に読経する儀式で、儀礼内容から言えば地蔵会ということになる。一方、「焔口」は『瑜伽燄口施食要集』を読誦するものであり、日本でいえば施餓鬼会（施食会）に当たる法要である。

地蔵堂などの堂舎の壁には、盂蘭盆に際して申し込まれた供養の紙位牌が貼られている。天蓋と蓮台の絵柄が印刷された紙位牌の中央には、「佛力超薦〇〇往生蓮位」と供養対象を記載する欄が設けられ、右側には施主の住所、左側には施主名が記載される形式になっている。供養対象は俗名や「〇〇府歴代祖先」といった形での先祖名が多く見られた。加えて「累劫冤親債主」と施主の身近な親族だけなく、「冤（うら）み」をもつような浮かばれない死者を含めて両方を供養する文言があり、「怨親平等」の供養を願うものとなっている。

写真５　紙位牌を拝む信者たち

写真６　誦地蔵経①

写真７　誦地蔵経②

誦地蔵経

開元寺における盂蘭盆会の前半の儀礼となる「誦地蔵経」は本堂にあたる阿弥陀堂で行われる（写真６・７）。中央須弥壇の前の五人の僧が木魚と小磬を鳴らしつつ読経を主導する。袈裟を纏った僧尼は二〇名ほどおり、一般の参加者は一〇〇人程度であった。各席に置かれた見台に『地蔵菩薩本願経』が予め設置されて、その上から「佛」と書かれたカバーが掛けられている。

開始時間から参加する者もいれば、読経中に途中参加する者もいた。途中参加の場合は案内役の尼僧が誘導する。参加者の服装は黒の仏教服（海清）を着ている人もいれば、Tシャツやポロシャツにサンダルといったカジュアルな服装も見られた。

男女比は男性が三割、女性が七割といったところで、年齢は四〇代から六〇代が中心だが、二〇代の若年層や七〇代以上の高齢層など幅広くみられる。この誦地蔵経という儀礼は僧俗がともに読経を行うシンプルな儀礼ではあるが、二時間ほどの読経を在家者も交えて行う光景は日本ではあまり見られないものであると感じた。

写真８　盂蘭盆会の供物

写真９　盂蘭盆会での嬰霊への供物

放焔口

一方、「放焔口」は観音菩薩を祀る大士殿を中心に儀礼が行われる。十四時から開催となるが、まず儀礼に先立ち爆竹が鳴らされる。一般の参加者は大士殿に備え付けられている『瑜伽燄口施食要集』を読誦する形となるが、先の「誦地蔵経」に比べて真言や手印が多くあるため、導師によって儀礼が主導される要素が強い。大士殿前の庭に列べられたテーブルには、多くの供物が供えられている（写真8）。供物に立てられた幡には「信士〇〇敬叩」と施主名を記載できるようになっている。また写真9のように「嬰霊（えいれい）」と書かれたテーブルもあり、日本の水子供養と共通するような台湾の嬰霊供養の要素が盂蘭盆会という仏教儀礼の中に含まれているのを物語っていた。[2]

放焔口の儀礼は、まず大士殿の本尊に向かい北面で進められる。その後、大士殿内に臨時で設営された机に向かい、南面して導師が宝冠をかぶり儀礼を進める。読誦される『瑜伽燄口施食要集』の冒頭には「阿難林間習定観音次現面然」「阿難頂禮佛足啓請救苦世尊方便授以陀羅尼法」の二図が掲載されている。「阿難林間習定観音示現面然」は観音菩薩が姿を変えた面然大士が阿難を脅す様子を描いたものだ。対して「阿難頂禮佛足啓請救苦世尊方便授以陀羅尼法」は困った阿難が釈尊に教えを乞い、陀羅尼法が授けられる場面を描いている。いずれも不空訳『瑜伽集要焔口施食起教阿難陀縁由』などに説かれる施餓鬼法の縁起を図像化したものといえる。[3]

写真10　『瑜伽燄口施食要集』

表題割注に、「千華第三世　定庵基删輯　千華十五世聖性宗増補儀観」とあるので、「定庵」が編纂したものとされている。

写真11　『瑜伽燄口施食要集』に掲載された釈迦と阿難の図

本経の項目を拾っていけば、「瑜伽燄口序・浄法界真言・點浄真言・加持花米真言・加持鈴杵真言・十二因縁呪・上師三寶真言・音楽呪・遣魔印・伏魔印・結火輪印・結真空呪・遣寶錯花米攝受・大衆默念心経・結運心供養印・遣魔印・次結変空呪印・結奉食印・結観音禅定印・結破地獄印・一心召請・結召請餓鬼印・結召罪印・結摧罪印・結破定業印・結懺悔滅罪印・結妙色身如来施甘露印・結開咽喉印・結三寶印・五如来称号・結発菩提心印・結三昧耶印・結無量威徳自在光明如来印・結前印誦乳海真言・結障施鬼印・結普供養印・大衆同年尊勝呪・普回向・結圓満奉印・薜荔多文・回向偈」となる。

この項目に示されているように「瑜伽燄口序」にはじまり、五方に結界をはって、東方に阿閦仏、南方に宝生如来、中央の毘盧遮那仏、西方に阿弥陀如来、北方に不空成就仏を請い、その五方如来を象徴する宝冠を導師が頂いて餓鬼たちを集めて懺悔滅罪させ、食を施して菩提心をおこさせ、五如来の力によって功徳を与える儀礼構成となっている。[4]五如来称号を中心とする儀礼構成は『大正新脩大蔵経』に載る施餓鬼法でいえば、『施諸餓鬼飲食及水法并手印』に共通するものなので、本儀軌の流れを汲むものと位置づけられる。

開元寺での施餓鬼会で最もドラマティックな場面は導師が饅頭などのたくさんの供物を地面へ投げるところである。饅頭や菓子が次々に餓鬼への「施し」として投げ与えられる。この際、とくに重要なのは参拝者が地面に落ちている供物を拾ってはならないように指示されることである。数十人の参拝者が供物を拾おうと集まってくるが、係の僧が待機して参拝者を厳しく咎めて制止する。

写真12　放焔口①

写真13　放焔口での施食

ただし儀礼が進むと導師が指で合図を出し、それ以降は参拝者が拾ってよいことになる。食の施しを受けた餓鬼がそれを享受するまでの時間を儀礼的に作り出していると言えるだろう。

②元和宮の普渡

元和宮は保生大帝（ほせいたいてい）を主神とし、五福大帝などを祀る廟として知られている。行政が設置した案内板には、元和宮 Yuanhe Temple（Dedicating Medical God）とあり、医療の神として祀られていることがわかる。保生大帝は呉真人ともよばれ、医神として広く信仰されている神である。[5] 保生大帝の生前の名を呉本といい、福建省同安県の人である。九八一（太平興国六）年の生まれで、科挙によって御史となったが、丹を練って人を救い、その医術は神の如くであったという。一〇三五（景祐二）年に没したあと、里人がこれを祀り、廟額を慈済と賜わったが、その後も何回か追封を受けている。

伝説によれば、時の皇后が乳房に腫物ができて苦しんでいた時に、皇帝は評判の高かった彼を呼んで隣室に入れ、品物に糸をつないでこれによって診察させたところ、これは皇后の脈ではないと答えた。感じ入って皇后の脈につけた糸を与えた。彼はこれによって病を診断し、薬を調合したところ、皇后はまもなく全快したので、皇帝は彼に保生大帝の号を授けたという。この他にも彼にまつわる話は多いが、一説には彼は唐代の名医孫思邈（そんしばく）であるともいう。龍が人間に化けて眼病を治しにきたのを治療したという話も伝えられている。

現在台湾では全島で一一〇ヵ所余りの廟があり、三月十五日の誕生日には各地で祭りが行われている。

写真14　元和宮の普渡

写真15　普渡の供物

写真16　普渡の祭壇

今回は元和宮の普渡儀礼を調査することはできなかったが、装飾や供物の状況は写真14、15、16に示した通りである。写真14の黒い台の上に置かれた洗面器とタオルは、集まった霊たちが手脚を洗うために置かれている。先述した開元寺では供物がすべて精進物であったが、道教廟では写真15のように、豚、ソーセージ、鶏、アヒル、鯉などが姿揚げなどにして供えられている。写真16は焔口を祀る紙製の祭壇で、「普渡植福」という立札が焔口に添えられている。

③慈蔭亭

慈蔭亭はかつては観音寺と呼ばれた観音菩薩を祀る廟である。写真17は慈蔭亭の入り口に張られた法会の趣旨を述べた掲示物である。この黄色の用紙に記された普渡の表白文は以下一七八頁に示すようなものである。

写真17　慈蔭亭の普渡の掲示物

写真18　普渡の供物

甘露法食
凄凄惨惨夜半天、孤魂無主実可憐。
縁柳堤頭無人伴、黄梅谷口獨自眠。
春秋祭祀誰為主、日月蹉跎不計秋。
今宵幸遇三壇主、参隨我佛往西方。
右仰無祀男女孤魂知悉。

これは七言律詩の形で法会の趣旨を述べたものであり、「孤魂無主」という文言や、最後の「無祀男女孤魂悉く知るべし」にあるように、無縁の霊である「好兄弟」たちに語りかける表白となっている。これは普渡が無縁の霊たちに対する儀礼であることをよく示している。

供物の多くはお菓子やキノコの干物、米などで、中にはスルメや豚肉なども含まれており、菩薩という仏教的な祭祀対象でも道教廟と同様の供物構成となっている。また写真18の左側に哺乳瓶があるように夭折者や水子に対する供え物も確認できる。加えて裁縫道具や歯ブラシなどもあり、これらは地獄から現世に戻ってきた霊たち

写真19　慈蔭亭の普渡儀礼

が汚れていたり、衣服が破れたりしているので、装いを整えるための配慮といえるだろう。

慈蔭亭の普渡儀礼は写真19にある通り、有髪の女性五名で執り行われており、読誦された経本には、変食真言、普供養真言などが含まれているため、仏式の施餓鬼会が営まれていたといえる。

三　台湾の普渡儀礼からみえるもの

以上、①開元寺の盂蘭盆会、②元和宮の普渡、③慈蔭亭の普渡の三つの宗教施設の盆行事を紹介した。本調査の第一の目的が開元寺の盆行事の調査であったため、②元和宮と③慈蔭亭の記述との差異がある点は否めない。そこでとくに開元寺の盂蘭盆会を念頭に置きながら、日本の盆行事と比較しつつ、台南市の盆行事の特色について考えてみたい。

まず第一点は開元寺の盆行事には、数多くの在家信者が読経に参加している点は、日本の仏教寺院の盆行事よりも在家との関係性が強く現われているように思われた。日本の盆行事でも檀信徒をはじめとする信者が儀礼に参列することは当たり前だが、経典をともに読誦することに力点が置かれることはそう多くはない。日本でも例えば曹洞宗では修証義などが配経されて檀信徒も読経に参加することはしばしば見られるものだが、開元寺の誦地蔵経では、法会に参加するというよりも読経のために開元寺に来ているような印象であった。僧侶が中心となりつつも、参加者全員が読経に参加し、僧俗が一体となって読経するという形が開元寺の誦地蔵経には端的に現れていたと考えてよいだろう。これは日本の読経する僧侶とそれを聞く檀信徒という形態とは異なるものと言える。

こうした信者による積極的な参加が見られる要因の一つに、開元寺の掲示物に読経や法会への参加の功徳が計り知れないことが説かれていることが挙げられる。日本における盆行事の案内では、夏の風物詩であるお盆が「先祖

供養」のためのものであることは説かれるが、無主孤魂、日本的な表現で言えば「無縁仏」の供養になるという内容で、はっきりと利益を説くことはそう多くはないのではないだろうか。施食会の回向文や位牌には「有縁無縁三界万霊」という供養対象が明記されているわけだが、日本はこのうち「有縁」を強調するのに対し、台湾の開元寺の盂蘭盆会は前半の誦地蔵経が「有縁」を、焔口が「無縁」の浮かばれない死者を供養する儀礼となっているのである。より図式的にいえば、開元寺の盂蘭盆を構成する誦地蔵経は、由来として十大弟子の目連尊者を挙げつつ、地蔵菩薩を中心とした明るい昼間に営まれる有縁の先祖を対象としたものであるのに対し、放焔口は由来として十大弟子の阿難を挙げつつ、五如来を中心として夕方の黄昏時に営む無縁の死者たちを対象としたものであり、それぞれ有縁と無縁の供養を担っている。

このような有縁供養（先祖供養）と無縁供養の側面をもつ盂蘭盆法会を意味づける語りは、「盂蘭盆会」を「孝子報恩」の儀礼として説く中で、目連救母の物語を全面に出しつつ、自分と系譜的関係にある死者たちを救う利益をも主張する。一方、「盂蘭盆会」を三界万霊供養の儀礼として説きつつ、「好兄弟」と呼ばれる無縁仏や浮かばれない死者（無縁仏）を救う利益も主張する。このような二面性はもともと施餓鬼という儀礼に内包されるものだが、こうした法会の霊験を全面に出して主張する点が台湾の仏教的な盂蘭盆会には顕著であり、普渡の場合はむしろ無縁の死者を成仏させる点に焦点化したものといえるだろう。浮かばれない死者である「好兄弟」が巷間に溢れているとされる鬼月に営まれる盂蘭盆の焔口はまさに、こうした死者たちに食を施し、如来と結縁させて普渡に導く儀礼なのである。

以上、台南市の開元寺の盂蘭盆会を中心としつつ、台湾の盆行事についての実地調査の結果を報告した。新型コロナの感染拡大に伴い、海外調査が難しい環境となっているが、今後状況が許せば台湾をはじめとする東アジアで

の寺院調査を継続して実施していきたいと考えている。また本調査で把握することができた台湾寺院での施餓鬼法と日本のそれとを儀礼論的な枠組みで比較検討することも今後の課題としたい。

註

（1）徳野崇行・武井謙悟・横山龍顯「二〇一八年度　仏教経済研究所　寺院調査レポート　地域社会における寺院の役割（三）—台湾台南市の寺院調査から」『仏教経済研究』第四十九号、二〇二〇年。

（2）台湾の嬰霊供養については、陳宣聿「台湾における嬰霊慰霊について」『東北宗教学』第一〇巻、二〇一四年を参照。

（3）『大正蔵』二十一巻所収（一三一九番）。

（4）『大正蔵』二十一巻所収（一三一九番）。

（5）野口鐵郎ほか編『道教事典』一九九四年、五四八頁。

参考文献

池上良正「現代中国の仏教復興——上海市の寺院調査から」『文化』第二十六輯、二〇〇八年。
池上良正『死者の救済史　供養と憑依の宗教学』角川書店、二〇〇三年。
鎌田茂雄『中国の仏教儀礼』一九八六年、大蔵出版。
都通憲三朗「台南の医薬神廟について」『仏教経済研究』第四十二号、二〇一三年。
劉枝萬『台湾の道教と民間信仰』風響社、一九九四年。